

日本三大漆器 - 紀州漆器

伝統と革新

作った製品を通じて、職人が一つずつ
一工程ずつ作り、ものづくりにたくさんの人が
関わっていることを感じてほしい。

町宗工芸 まちむねこうげい

海南市は、福島（会津）や石川（輪島・山中）と並ぶ日本三代漆器産地として知られ、紀州漆器の歴史は室町時代から続きます。町宗工芸は、そんな漆器の産地で創業からおよそ100年、塗り加工を行ってきました。創業時から受け継がれた技術を基礎にしながらも新しい技術・塗料を積極的に取り入れ、現在ではLEDサインや雑貨、プラスチック製品など様々な商材への塗りを行っています。私たちのいる海南・黒江は、革新的な漆器産地として時代の流れや現代の暮らしに寄り添い、常に新たな技術を取り入れ進化し続けています。

〒642-0012

和歌山県海南市岡田223-20

TEL : 073-460-9933

Instagram



@machimunekougei

和歌山県海南市の北部に位置する黒江。この街は四〇〇年も続く漆器の名産地だ。黒江で生産される紀州漆器は会津塗や輪島塗と肩を並べ、日本三大漆器の一つである。紀州漆器の起源は室町時代にも遡る。近江の木地師が黒江の地に移住し汝地椀と言われる椀を作ったのが始まりとされている。一般的な漆器では下地にも漆を利用しているが、紀州漆器は柿渋や膠（にかわ）を使用し丈夫に仕上げている。江戸時代には、分業制が敷かれ更に漆器産業が盛んになった。何百年にも渡り人々の生活を紡いできた紀州漆器。私達はその塗り加工を行っている町宗工芸を訪れた。

三大漆器産地の黒江

▶町宗工芸三代目
町田智哉さん

一〇〇年の伝統 町宗



町宗工芸は黒江で塗り加工を行っている。歴史は古く、現在は三代目の町田智哉さんが家業を受け継いでいる。一〇〇年以上前に町田さんの曾祖父が町宗工芸の前身となる町音という名で塗師を行っていた。約七十五年前に名を町宗工芸に改め、現在は漆器などの日用品にとどまらず、様々な塗りを行っている。

紀州漆器・町宗工芸の歴史

紀州漆器塗り丸盆がでるまで

出来上がり

8

検品、箱入れ

1

研磨

(スリットロール400番)

塗装時に色がより乗りやすいように表面を削る

2

5



②掃除

⑤裏掃除

塗装時に埃などによって表面が凸凹にならないようにする

3

6



③表面吹き付け塗装

④裏面吹き付け塗装

(塗料：カシュー)

4

7

翌日60°Cで三時間

乾燥炉にいれる



職

「ものづくりにとくさんの人が関わっていることを感じてほしい」

町宗工芸三代目

町田 智哉さん

MACHIDA TOMOYA

PROFILE

1987年 11月22日
和歌山県海南市生まれ

海南市黒江の町宗工芸で漆器等の塗りを行う。昨年開催の和歌山ものづくり文化祭に出席。当日、塗装体験のワークショップは多くの人で賑わった。

前職のアイン食品株式会社ではサッカー部に所属し、関西社会人サッカーリーグ最優秀新人賞を受賞した実績をもつ。

「僕は、とりあえず「やってみる」（チャレンジする）マインドを持つ事を心がけています。ワークショップに出席したことがなかった町宗工芸として、ものづくり文化祭に出席するのも悩んだけど、とりあえず「やってみる」ことで終わってみると形になってしっくりできました。それは普段の仕事にも生きていて、今まで塗装したことのない漆器以外の物に塗装する時にも、とりあえず「やってみる」事で成功し、失敗はあるけど様々な学びを得ています。何が大事かというと、失敗を恐れずにチャレンジ精神を持つ事。その失敗が次の成功を生む肥やしになるから。」

Machida's motto

「やってやれんことはない」



日本でどんどん進む少子高齢化。黒江の街の漆器関連産業も例外ではない。少子高齢化が進み年々職人が減少している。そんな中、伝統工芸の担い手として数少ない若者である町田智哉さん。そんな町田さんは、小さい頃から漆器職人を目指していたわけではなかった。町田さんは幼少の頃からサッカーに勤しみ、高校、大学はスポーツ推薦。その後、実業団サッカーチームのある会社に就職した。家業である漆器についてあまり触れる機会はなかったという。そんな町田さんに転機が訪れたのは就職して数年後のことだった。怪我が原因で現役を引退。そんな中家業を継ぐ決心をした。「家業が百年も続く歴史あるもの。それを絶やしてはいけないと思った。」そう語る町田さん。大人になってから技術を一から習得するのは簡単なものではなかったという。

「新しい、難しいものができた時、自分が塗ったものが店舗等に飾られているのを見た時に達成感を感じる。」と笑顔で語る。そんな町田さんには、仕事において譲れない強いこだわりがある。

「新しいことをすること。リスクはあるが、そこから新たな仕事広がっていく。」その言葉通り実際に従来ではイメージのない、そんな新しいものにも町田さんは「塗り」を行っている。毎年冬に和歌山マリナーシティで行われているFeStA LuCe。今年、入場口に大きく飾られた電飾の「塗り」は町田さんが手掛けたものである。伝統×ネオンサインという新しい試みである。遮光したい部分に「塗り」を施すのだそう。「新しいことに挑戦することはやりがいの反面、プレッシャーも感じる。だけれど『やってやれんことはない』、チャレンジするというマインドを持つことを常に意識している。昨年11月の和歌山ものづくり文化祭に出席するかどうかもすごく悩んだけど「やってみる」ことで形になった。普段の仕事の中でも塗装したことのないものに塗装することで、失敗はあれど学びを得られる。その失敗が大きな肥やしとなって成功に繋がる。」町田さんはこれからも伝統の中で新たな可能性を探求し続ける一。